



舟橋というものをローマ帝国がしばしば利用していたことは、塩野七生の「ローマ人の物語」の第何巻かで読んで知っていた。北方の蛮族(というのも変だが)を制圧するためライン川だったか、ドナウ川だったかを渡るために舟橋を作ったという記述があったはずである。当時のローマ兵は兵士であると同時に工兵でもあったとは塩野氏の指摘するところである。むしろ平時は土木建築技術

に長けた技術者集団として帝国内に張り巡らされた街道の建築と整備補修に当たっていた。ただ日本では佐波川にかかるこの橋だけが「舟橋」様式だと、大した根拠もなく信じ込んでいた。ところが過日開催された語り部の会の研修会講師から他藩にもあったとのご指摘を受けた。本文に「他藩にもなかったのではないかとぼかして書いてはいるが、明らかに他藩にも舟橋は存在していたのである。もはや訂正しようもないが。

改めて調べてみると、確かに長州藩とは比べものにならない艘数の船が並べられた舟橋が存在していた。その中でも大規模なものは木曾川のそれである。この橋は一般庶民は渡ることが許されず、唯一将軍ないしは朝鮮通信使のみが渡ることが出来たという。驚くべきはその舟の数である。大きな舟 44 艘と小舟 230 艘が使用され、しかも舟の上に敷かれた板は 3 千枚以上にも上ったというから、到底佐波川の比ではない。何せ川幅は 800m 以上あったのだからそれも頷ける。ここ以外にも、天竜川、富士川、相模川にも敷設されていた。そして東海道だけでなく、富山の神通川、北上川、九頭竜川にも 50 艘から 80 艘規模のものが掛けられていたようだ。佐波川の隻数は古写真から確認する限りでは僅か 6 艘で、川幅 38m となっている。身鼻頂とは実に困りものである。もう一つ、本文にも書いたように色々な資料には佐波川の舟橋は昭和 16 年まで存続したと書かれている。しかし防府市生まれの知人の話では、戦後にも存在したとのことである。真偽の程は確かめようがなく生憎手許に「防府市史」もないが、これにはもっと詳しいことが書いてあるだろう。いつもなら図書館に走って確認するのだが、このイラストの発信日が迫っていてそれもままならない。ただ近くにある萩往還の新しい看板には「それ以降、昭和 26 年の台風で流されるまで「木橋」が架けられていたとの記述があるので、もしかしたらこの事を指しているのかも知れない。(2021.11.25 記)



イラストでたどる 萩往還 32 佐波川舟橋

佐波川に架かる舟橋を思い浮かべると「根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」という言葉を思い出してしまふ。洪水ともなれば足止めを喰らって難儀する川越え。萩往還を歩く際に渡る唯一の一級河川・佐波川はこのように舟を並べ、その上に板を張って渡っていた。何度も洪水で流されたためこのような方式が採られたのだが、洪水となる前に舟は陸揚げされたから、当然大井川同様に通行止めとなった。萩藩では他に見られない橋で、他藩にもなかったのではないかと推測された。イラストの風景も当然江戸期のもではなく、明治大正期のもと思われる。

文イラスト II

古谷眞之助